



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	講評
Author(s)	鈴木, 一人
Relation	第6回 人文・社会科学系研究推進フォーラム報告書 II ワークショップの記録 「人社系が参画・先導する学際プロジェクトとは」
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83462
Type	conference presentation
File Information	JF6_hokudai_2-4_Suzuki2.pdf





講 評

東京大学 公共政策大学院・教授 鈴木 一人

皆さんが非常に熱心に、この議論をしていただいた結果として、これだけ長い報告になったということは、この文理融合、学際研究、超学際、トランスサイエンスということに関する皆さんの関心がそれだけ強いんだと思うのと同時に、いくら議論しても答えが出ない難しいテーマでもあるんだろうと、皆さんの話をいろいろ聞かせていただいて感じたところです。

いろいろな課題、論点が出されたので、私のほうで何かそれを繰り返したり、まとめて講評したりするのは難しいのですけれども、まず今回皆さんのお話を聞いていて強く感じたのは、やっぱり理系・文系の分断の根深さであり、また、その根深さをどう乗り越えるかというときのツールの少なさだと思いました。こうやればうまくいくという出来合いの手段があまりなくて、例えば飲み会をやって、一緒に議論を尽くすというような、アナログなやり方しか実は解決方法はないんだろうなと感じさせられるところがありました。

私自身、一人文理融合みたいところがあって、理系の先生方と一緒に仕事をすることは非常に多いのですけれども、それでも考え方は皆千差万別で、理系と言っても、例えば工学系の先生と理学系の先生と医学系の先生では、全く考え方が違いますし、同じようなモードでこちらが政治学という立場で話をしても、受け止め方はそれぞれ違うので、一緒に働くということの難しさを、日々痛感しています。

その中でも重要なのが、お互いに違うんだということをリスペクトすることだと思います。私がしばしばやりにくいと思うのが、理系の先生が、その理系のやり方を文系に合わせさせようとするときです。こうでなくてはならない

みたいなものが前提に立ってしまうと、非常にやりにくいと感じるときがあります。

逆に、そっちはそうなんだよね、こっちはこうなんだよねという、それなりのお互いのフィールドを認めつつ、でも一緒にやれるところはどこかを探していく、そういうことが結構重要なかなと思ってます。その点では、先ほどグループ8の中川さんからのご報告で整理されていたことって、すごく有用だなと感じました。

それ以上にやっぱり難しいなと思うのは、「何のために」この研究をやるのかというときに、文系の中でも、政治学、法学、経済学、その他もろもろの分野があって、それぞれ何のために、何を目指してこの研究をやっているのかということは、個々人のレベルで違うという点です。社会問題を解決することが文系の目的かと言われれば、そうでない文系の研究もいくらでもあるわけで、文系というくくり自体に限界がある。そういう意味では、今日何人かの方がおっしゃっていましたが、全員が文理融合することは多分無理で、どういう分野で、どういう研究目標で、研究者としてどういうアイデンティティを持っているのかという、属人的な部分で文理融合ができる人が、まずは必要なのだろうと思います。そして、そういう人を見つけるのがURAの仕事の一つなのではないかなと、今日のお話を聞いてすごく感じたところです。

先ほどグループ10の方から、社会実装を研究者がやるべきかというご質問がありましたけれども、文理融合をやっていこうという意識を持っている人たちは、おそらく社会実装までついていける人たちなんだろうと思います。例えば、AI研究では、人間とは何かということに関わる哲学者も文理融合の世界に関われるようになってきている。このフォーラムの講演の部でも、北海道大学人間知・脳・AI研究教育センターの田口先生がお話しされていました。かといって、じゃあ哲学者が常にAIの社会実装までおつき合いするのかというと、それは違うと思います。なので、どういう目的を持っているのかということ、融合研究それ自身が研究者にとっての価値になるのかどうかという点で、その研究者が社会実装までコミットするかが決まってくるのではないかと思います。ですので、研究者は社会実装までコミットしなければならないとい

うのではなくて、どちらかというと「この指止まれ」というか、文理融合が研究の目的に合致していく人が関与していくべきであって、関与するなら研究者も社会実装まで関与するというルールないしパターンを作る必要があるのではないかと考えています。

こうした中、今日の議論を一通り聞いて、やっぱり気になったのが、ちょっとメタな話になりますけれども、文理融合自体は、手段なのか目的なのかというところです。今回はそれが目的になっているわけですね。文理融合するにはどうしたらいいかという議論を今やっているわけですが、しかし私自身、自分が文と理を掛け持ちするような研究をやっているのは、あくまでも手段だと思っていて、やっぱり文理融合は手段であるべきだと思うのです。その先に、例えば社会問題の解決とか、何らかの真理の発見だとか、文理が一緒になってやることによって、この問題が解決する、つまり、何かどこかに出口がある——そのための手段としての文理融合なのではないかと考えています。

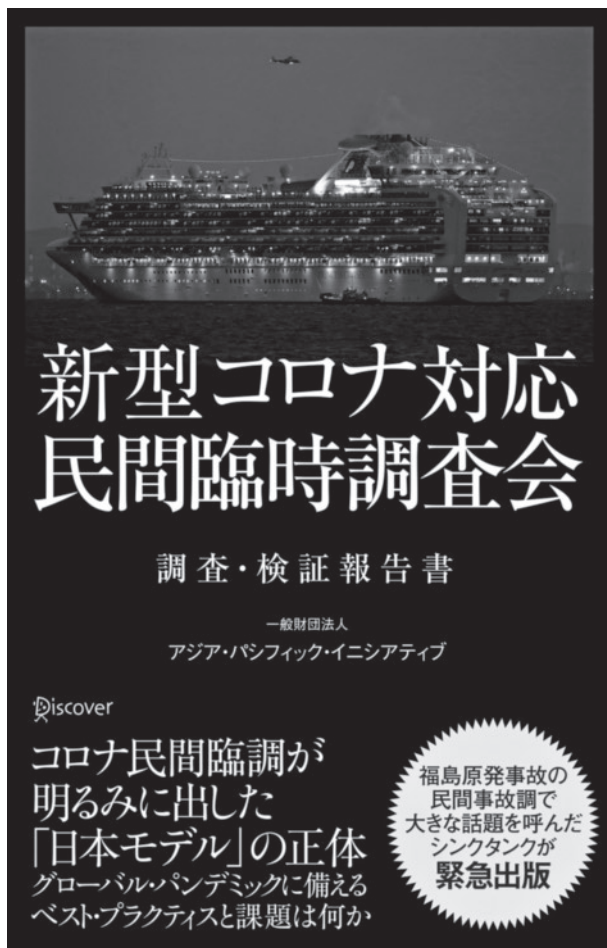
ただし、そこですごく難しくなってくるのが、研究者はみんな手段と目的を自己完結させているということです。自分はこういうことをやりたい、だからこれをやる、私はこういうことを知りたい、だから政治学をやる、私はこういうことを実現したい、だから何々工学をやる——こういうふうにして、目的と手段は、研究者の中で自己完結しているので、じゃあその自己完結している研究者たちを、文理融合を手段として、ある問題を解決するためにつなげていく、これがURAの役割なのかなと今日強く感じました。研究者の皆さんが共有している社会目標は何なのかを見つけ出し、そしてそれをぐるっと取り囲むような問題設定をして、それに関わるさまざまな分野の研究者を目利きするというのが、おそらくURAの仕事なんだろうなというふうに思います。私自身は、研究者という立場でいると、政治学の先生が他に何をやっていて、どんなことを目指しているか、どういう社会的な目標を持っているか、研究者のアウトプットを、どこにどういう方向に向けているのかというのは、政治学というコミュニティの中では、ある程度わかります。ところが、経済学で、哲学で誰が何をやっているかと聞かれると、もうさっぱりわからないわけです。それが理系になれば、さらにわからないです。

たまたま私は、宇宙政策についてやっているの、宇宙に関わる分野の人は、知らないわけではないのですが、ただやっぱりそういうことをマッピングする仕事は、おそらく URA の仕事なんだろうなというのを、今日、話を聞いていて強く思った次第です。

文理融合という言葉がここまで広く使われる言葉になって、科学技術基本法も変わって、新しいプロジェクトとして学際研究が重視されるようになってきたのは、そうでないと解決しない問題が増えてきたからだと思います。しかし、課題解決型として出されるテーマに対して、じゃあ誰が適任なのか——文理融合に向いていると言うとちょっと語弊があるかもしれませんが——、どういう先生方をピックアップしてチームを作ればそこにケミストリーが発生するか、というようなことが重要になるかなと思っています。

開会の挨拶で申し上げた『新型コロナ対応・民間臨時調査会 調査・検証報告書』についてですが、この調査は、アジア・パシフィック・イニシアチブ（API）というシンクタンクが主導して進められました。API 理事長の船橋洋一さんがプロデューサー役として人を集めてきて、いろいろなリソースを用意してインタビューしました。役職は当時ですが、安倍総理から始まって、加藤厚労大臣から、西村経済再生担当大臣から、いろいろな人たちとヒアリングしました。こういうものは船橋洋一さんでないとできないという、ちょっと特殊なケースではありますが、ただここから学べるがあります。それは何かというと、やっぱり重要なのは人なのですね。つまり、チームとしてやれる人たちがどういう研究者で、コミットしてくれる人は誰で、そしてそういう人たちがどういう能力を持っているのか、どういうスキルセットを持っているのかということを把握した上で、じゃあこの人たちを集めれば、こんなプロジェクトができるというイメージが船橋さんの中にあってプロデュースをしたのだと思います。それは、例えば映画を作ろうと思って、ではこの役には誰がいいというキャスティングをやって、そのためのお金を集めてきて、映画を作るというのと、多分似ていると思います。だから文理融合のプロジェクトというのをやっていくためには、そういうプロデューサー役が必要で、恐らくそのプロデューサーの仕事に一番適しているというか、その役を担うのが

URAの方々なんだろうなと思った次第です。ですので、私の話がどの程度役に立つのかわかりませんが、今日皆さんの話を聞いて、また自分の経験に照らしてみても今日の話をまとめてみると、こんな感じになるのかなということで、私のコメントとさせていただきます。ありがとうございました。



一般財団法人 アジア・パシフィック・イニシアティブ
『新型コロナ対応 民間臨時調査会 調査・検証報告書』
ディスカヴァー・トゥエンティワン刊